

# 多民族領域帝国ソ連における

## 地理学と空間・地域認識

——戦後スターリン期を中心に

地田徹朗

### はじめに

本稿では、ソ連における地理学史について、戦後スターリン期を中心に検討する。ここでいう「ソ連地理学」とは、あくまでソ連の中央であるモスクワとレニングラード（つまり、ソ連帝国の「中核」）の地理学界での議論を対象とし、民族共和国を中心とするソ連の地方（つまり、ソ連帝国の「周縁」）における地理学は考察の対象から外すことをあらかじめ断っておく。

多民族帝国たるソ連はピラミッド型の民族領域構造を有

し、それは一九二四年に開始された民族・共和国境界画定を契機として形成され、その作業は一九三〇年代に基本的に完了した。多くの民族に自治領域を付与したことがソ連帝国の特殊性であり、「連邦中央⇨民族領域」という独特な「中核⇨周縁」構造が構築された。<sup>\*1</sup>このようななかで、いかにして帝国周縁の「民族」及び「領域」を区切るのかということが初期ソ連の最重要課題のひとつとなった。そして、この課題の解決の担い手として民族学（этнография）が国家によって動員され、民族及び民族領域の分類・区画のためにさまざまな材料を提供した。現に、民族・共和国境界画定時には上は連邦構成共和国から下は村ソヴイェト・レベルにまで民族の領域的自治原則

が貫徹された。さらに、「後進的」とされた諸民族には要員育成と文化建設の面から「アフアーマタイプ・アクション」的な政策がとられたことは今日では共通見解になりつつある (Martin 2001)。

これに対し、地理学は、ロシア自然生産力検討委員会 (КЕПЦ) やその後継組織であるソ連邦科学アカデミー生産力検討会議 (СОПСАИ СССР) とつた機関を通じて、周縁地域に眠る余剰資源・耕作可能地の調査・開発、ソ連全土の経済地域の区画事業において中心的な役割を果たした。このように、ソ連初期において、民族学が人間集団の分類を通じて帝国周縁「知」を獲得する学だったとするならば、地理学は空間の分類を通じた周縁「知」の獲得によって、帝国の中核が周縁地域へと経済的に浸潤していくひとつの手段を提供する学だったといえる。<sup>\*2</sup>

本稿では、以上のような基本認識の下、帝国中核による周縁への経済的浸潤を行う上での理論的基礎となる、ソ連地理学における「空間」や「地域」認識の変遷について、戦後スターリン期の地理学方法論に関する論争を中心に据えて検討する。はじめに、ソ連地理学における民族・階級・文化といった人文的要素の排除について論じる。これにより、ソ連地理学でひとつの焦点となっていた人間と環境の関係における「人間」が、人文的差異を欠いたきわめて画一的な存在であったことが示される。次に、著名な二

人の地理学者ベルグとグリゴリエフの間での地理学方法論に関する論争 (ベルグとグリゴリエフ論争) について取り上げる。戦前より、ソ連地理学には、ベルグを中心とする地域や景観の地誌を記述し、それを分類・区画する「景観地理学 (ландшафтоведение)」、そして、グリゴリエフを中心とする地球の地理的外殻 (географическая оболочка Земля) (大気圏、水圏、生物圏など) における自然地理的プロセスの解明を目指す「地球物理学 (геофизика)」に接近する地理学 (この学派は一部の地理学者から「プロセス地理学 (процессоведение)」と揶揄された (Смирнов 1950: 92))、そして「経済地理学 (экономическая география)」の三つの潮流が存在した (ただし、以下に述べるように、経済地理学についても内部に複数の学派が存在した)。ベルグとグリゴリエフ論争は前者二つの学派の間での論争であった。その後の三つの節では、一九四八年にスターリンの号令により開始される「自然改造計画」の地理学論争への影響とその行く末について検討する。当時、自然改造への学知の応用の必要性という観点から、応用性が乏しい従来の地理学理論に対する批判がソ連地理学界内部に巻き起こった。なかでも、スミルノフという地理学者は自然改造計画のイデオログたるヴェリヤムスやルイセンコの理論を称賛しつつ、ベルグ、グリゴリエフ双方を糾弾する議論を展開した。このスミルノフによる議論はソ連

地理学界でさらなる論争を呼んだが、ソ連地理学者たちは冷静に対応し、最終的には景観地理学も地球物理学的地理学も救い出されることとなる。また、自然改造計画は、人間の経済活動と自然環境との関係性に関する議論も活発化させ、論争は経済地理学の在り方（経済地理学と自然地理学は単一のものか否か）にまで及んだ。

戦後スターリン期の地理学論争は、他の学問分野での論争と同様、多分に社会主義イデオロギーのターミノロジーが用いられ、学説のイデオロギー的正統性も論争のひとつの焦点となったことに疑いはない。しかし、コジェブニコフが述べているように、社会主義イデオロギーが学知のなかで多大なる影響力を振るったスターリン時代といえども、「遺伝学のように」ときとしてイデオロギー的な議論や告発が甚だしく用いられることはあったが、それ以外のケースでは、議論はおおむね学術的なもので、政治的なレトリックが用いられたのはリップサービスにすぎなかった」（Kojenikov 2004: 190）。戦後スターリン期の地理学論争もイデオロギー論争のみに還元されるべきではなく、そこには地理学という学問体系内部で自律的に展開された学術論争の側面もあったと筆者は考えている。以下に述べる「ベルグ・グリゴリエフ論争」や「単一地理学論争」にみられるように、戦後スターリン期における地理学論争は、まさに地理学がひとつの学問体系としてどのような

べきかという側面を多分に含んでいた（戦後スターリン期ソ連地理学に関する重要な先行研究として、小野（1983）及び Shaw & Oldenfield（2008）を参照）。このような自律的な学知内部の論争がいかに自然改造計画を含む国策に影響をもつようになり、ソ連帝国中核の権力によって絡めとられていったか、この点についても着目したい。

## Ⅰ ソ連地理学における人文的要素の排除

戦前から戦後スターリン期にかけてのソ連地理学の特徴としてあげられるひとつの要素は、地理学からの人文的要素の排除であった。一九二九年より、より伝統的な「部門・統計的地理学（отраслево-статистическая география）」の影響を受けつつ、後に「レヴァキー（Левакки 左翼偏向主義、極左主義の意）」と呼ばれる経済地理学の学派の活動が活発化した。この学派は、経済地理学から人文的要素を排除し、経済活動における自然環境の役割を除外し、経済地理学と自然地理学の統一を否定し、経済地理学は「経済科学」たるべきだと主張した。「レヴァキー」が批判を浴びせたのは、著名な経済地理学者であるニコライ・パランスキーが率いる経済地理学の「地域学派（районная школа）」であった。この学派は「生産力の領域的結合法

則の研究」(Сашкин 1980: 147)を旨とし、環境ファクターの経済活動への影響についても視野に入れ、その結果生じる経済地域・地誌の解明を目指した。中村泰三によれば、「レヴァキー」の活動は一九三四年に終止符を打たれたとのことだが(中村 1982: 260)、地理学からの人文的要素の排除傾向は「レヴァキー」の間だけに留まらなかった。バランスキーは、一九四六年に経済地理学と自然地理学の完全な遊離状態を憂い、さらに、両地理学から地形・水文や農工業の生産配置などの詳細はわかるとしながらも、それでは「その自然条件のなかに住み、経済を創り出している人間の特徴(особенности народа)についてわからない」(Баранский 1946: 12)と人文的要素不在のソ連地理学を批判している。しかし、バランスキー自身が認めたソ連の経済地理に関する教科書には、ソ連の各民族共和国(及びロシアの諸地方)の経済地誌に関する記述はあるが、この「人間の特徴」が経済活動にいかなる影響を及ぼしたかの記述はない(バランスキー 1953)。むしろ、バランスキーの議論が影響を及ぼしたのは、いまだに階級差や民族の實質的な差異が厳然と存在しているとされていた資本主義国に関する地理・地誌研究に対してであったと考えられる。そもそも一九三〇年代(及びそれ以降)のソ連地理学における「人間」とは、民族的・文化的差異を捨象した画一的なカテゴリーであった。一国社会主義体制の完成により

階級闘争が終焉し、ソ連市民の間で階級格差が公式に解消されたことで、階級的差異も捨象される。そして、スターリンによる「形式において民族的、内容において社会主義的」という有名な民族文化に関する定式化に表現されるように、社会主義国においては、いわゆる人間の何らかの差異が経済活動に影響を及ぼすという議論は公に否定されるわけである。戦後スターリン期の地理学理論のイデオロギーの一人であるイヴァン・イヴァノフ・オムスキーが述べているように、「社会主義的所有は、全社会の人員をひとつの集団に統一し、それによって、自然に対するまったく新しい強力な作用力を作り出す」(Иванов-Омский 1950: 148)(傍点地田)。このような画一的な人間像が、以下で論じるような民族領域を跨ぐ広大な領域で展開されることになる自然改造計画の前提であった。<sup>\*3</sup>

## II 「景観」か「地理的プロセス」か

### ——ベルグ・グリゴリエフ論争

自然地理学の分野では、ココロギー(分類学)的手法に基づいて地表面を「景観(ландшафт)」や「景域(ландшафтный зон)」に分類し、各景観内部での地理的環境の記述(описание)を地理学の役目とし、各景観内

部では地理的環境と人間活動の調和がとれているとの理論を前提とする、レフ・ベルグを中心とした「景観地理学」がソ連地理学界では一大勢力を形成していた。ベルグはレニングラード大学で教鞭をとり、一九四〇年より全ソ地理学協会を率いていた。この学派はドイツの地理学者であるアルフレート・ヘットナーの影響を強く受けていたといわれている。ヘットナーはカントの自然地理学理解の影響を受け、時間を扱う歴史学と空間を扱う地理学を截然と区別し、「地理学は時間に応じた変化や経過そのものを追究するのではなく、(中略)事実を通じて、ある限られた期間内の平均を求め、時間的発達は与えられた時間における状態を説明するためにのみ関係がある」(ヘットナー 2001: 209)と主張した。そして、ヘットナーは地理学を地球に関する一般科学ではなく、「地球物理学は地理学の核心でもなければ地理学の一部分でもなく、独立している」とし、最終的に「地表の地域科学としての地理学」を提示した(ヘットナー 2001: 194-195)。ベルグは景観を「とくに、地形、気候、水、土壌及び植生による被覆、それと同様にある程度までは人間活動までもが不可分な調和のとれた全体へと合一化する物体と現象の総体」と定義し、それは「地球のある一地域の空間で反復される」(Ботычарков 2006: 401)とした。もともと、西川 (1961) が論じているように、「地理学が対象とする地表空間は、諸事物が並存し、

相互に作用する動的な実態であり、それを理解するためには、発生的考察、場合によっては短期間の、あるいは長期間の周期的、非周期的変動、そしてまた発展の過程、前進的变化を追跡する必要があることをヘットナーは明言している」(西川 1961: 19)。つまり、ヘットナーは決して地理学における「時間」の問題を無視していたわけではなかった。これに対し、ベルグは、「個々の景観を理解することができるのは、それがいかに発生し、時間の経過とともにいかにそれが変化していったかを知ったときのみである」(Ботычарков 2006: 401)と論じ、地理学における「時間」の問題についてヘットナーよりも一歩踏み込んだ議論を展開している。しかし、それでもやはりベルグが「景観」を実際に記述する際の対象空間は共時的なものであった(Berg 1950)。

これに対して異議を唱えたのは、一九三一年にソ連科学アカデミー地理学研究所の初代所長に就任したアンドレイ・グリゴリエフを中心とする一派だった。グリゴリエフは、ベルグの地理的環境の記述とその分類、分類された各景観内部での調和を前提とした地理学を否定し、地球物理学に接近する計量的手法を用いた地表面の地理的外殻における各圏のプロセス全般とそれらの相互関係の解明を指し、地理的環境の「発展プロセス」を明示することを自らの課題とした。グリゴリエフ本人はヘットナー自身の弟子

であったが、彼の研究手法の限界を乗り越えるべくこのような結論に辿り着いたようである。「発展」という概念を前面に押し出すことで、地理学における「時間」と「空間」の關係問題を首尾よく解決しようと試みたとも言える。グリゴリエフらによるベルグ批判の起源は古く、一九三〇年代初頭に遡る。一九三二年に刊行された『地理学・経済地理学的方法論的戦線において』という論文集で、ヴラジミル・ヴォリベという経済地理学者はベルグを批判して次のように述べている。

「ベルグにとって地理学とは景觀に関する学である。

景觀とは、自然的諸徴表の総和をもって区画された一定の地域的単位である。ベルグにとつてもヘットナーにとつても特徴的なのは俗流經驗論、すなわち諸事象や微細な些事の記述であり、意義の少ない諸要素をそれらの相互的關連から離れて、かつ、根本的で、主要な、指導的原則を解明することなしに累積することである。それでも、ベルグは普遍化の試みを行っている。だが、彼にとつて景觀 (ландшафт) とは、景域 (ландшафтные зоны) から構成される単位であり、つまり、それ以上に幅広いものではないということ指摘すれば充分である。しかしながら、ベルグにおいても、根本的なものを把握しえず、景觀の發展をあらゆる弁

証法的本質において示すことができなかった」(Вопросы 1932: 37-38)。

これは、景域相互の關連性や景觀の發展に関する考察を欠く、記述的手法による景觀地理学の否定であった。同書にはグリゴリエフも論文を掲載し、ヘットナー地理学をひとしきり批判した後、次のように自らの立場を表明している。

「古地理学は、古生物学及び地質学と相俟つて、

地球の自然地理的外殻 (физико-географическая оболочка) の弁証法的發展の壮大なる光景を我々の前に広げてくれる。しかししてこの發展過程において外殻はますます新しい質を獲得し、同時に、大気上層部及び地球深奥部とのコントラストはますます増大した。この地球の自然地理的外殻の發展過程は、加えて、有機界の構造がますます複雑化していくことを特徴とする。かくして、この發展過程については人間と人間の萌芽を生み出した。人間社会は弁証法的に發展することにより、ついには地球の自然地理的外殻のその後の弁証法的發展の第一的要因へと化したのである。この要因の役割は、生産力の成長、すなわち社会経済的諸關係の發展とともに増大かつ複雑化し、そして自然地理的過程の深遠

な変化と、自然が生み出した諸物体、エネルギー及びそれらの潜在的な予備の（技術を媒介とする）もつとも深遠な変化によってのみ得られる諸物質及び諸エネルギーの利用という点とに表される」（Григорьев 1932: 50-51）。

このように、グリゴリエフは「（自然）地理的外殻」という概念を用いつつ、その発展過程のなかに人間の発展段階を組み入れ、人間の生産活動の発展段階に応じ、自然界の物質とエネルギーがより深く人間活動に導引されると論じている。そして、その後、「自然地文帯（физико-географическая зона）」なる地理的環境の境界区分について論じているが、それはベルグのような、地球全体のプロセスから遊離して、ただ内部で調和のとれている「景観」や「景域」を指すのではなく、地球システム全体を想定しつつその内部で量的・質的指標の表れ方に差が出た地域を想定している（Григорьев 1932: 57）。

ボグチャルスコフが指摘しているように、グリゴリエフによるベルグ批判の主要な点は、ココロギー的手法を用いることで地理学の対象が個別の領域の考究に留まってしまう、地表面を総合的・全体的に考察する視点を欠いているということであった（Богучарков 2006: 422）。すでに、一九三七年には、グリゴリエフは「自然地理

的外殻の統一性（целостность）、その内部構造の調和（единство）、その内部で進展する複雑な複合的プロセスの調和」（Григорьев 1937: 67）について指摘している。後にグリゴリエフは、この論点を、太陽熱の放射収支や水分収支（降雨・蒸発）が地表面の在り方を決するとの「単一の自然地理的プロセス（единный физико-географический процесс）」理論に収斂させ、一九四六年には、このアナロジーで人間社会の発展を原動力とする「社会地理的プロセス」が地表面における文化景観の在り方を決するとの主張を展開することになる（Shaw & Oldenfield 2008: 1413）。最終的にベルグ⇨グリゴリエフ論争に終止符が打たれるのが戦後スターリン期であった。それは、スターリン自身が推進した「自然改造計画」への地理学者の参画と関連している。

### Ⅲ 「自然改造計画」とベルグ⇨グリゴリエフ論争の行方

一九四六年二月、ソ連邦最高会議選挙前集会におけるスターリン演説において、科学重視の方針が言及され、それが物理学界を中心にソ連科学界に熱狂を巻き起こしたことはよく知られている。一九四八年一〇月二〇日付で、全ソ

共産党（ボ）中央委員会・ソ連閣僚会議決議「ソ連邦ヨーロッパ部のステップ及び森林ステップ地域における、大量で安定的な収穫を確保するための防護林と牧草輪作システムの導入及び溜池・貯水池建設のための計画について」が出され、戦後復興と共産主義建設とを関連させた大規模な「自然改造」がソ連の国策となった。この決議は「ヨーロッパ部」と名づけられているように、対象とされたのはウラル山脈以西、おおむねカザンやリヤザン以南のロシア及びウクライナ全土を含んだ地域であった。一九四九年から一九六五年までにコルホーズ・ソフホーズ圃場の保護植林を大々的に行い、さらに、ウラル川沿いから西に縦に四本、河川沿いに四本の防護林帯を形成。さらに、内陸部を中心に数多の溜池・貯水池を造成し、農場では本来の播種作物栽培に牧草栽培と休耕を混ぜ合わせた「牧草輪作方式」を導入するよう促した（Orinche 1951）。植林及び溜池への貯水は、土壌学者のヴァシーリー・ドクチャエフとパーヴェル・コストウイチエフの理論、牧草輪作方式はヴァシーリー・ヴィリヤムスの理論の実践であった。そして、遺伝子の存在を否定し、植物を環境馴化させることにより異なる地理的環境下への移植が可能だとの説を唱えた農学者のトロフィム・ルイセンコが自然改造計画のイデオログとなった。

一九五〇年には、ヴォルガリドン運河、クイブイシエフ

水力発電所、スターリングラード水力発電所建設を中心とするヴォルガ川の水資源開発、南ウクライナ運河やカホフカ水力発電所建設などによるドニエプル川の水資源開発、さらにはカラカルパクスタンからトルクメニスタンへと注ぐ主要トルクメン運河（Тяньшиз [Туркменский канал]）建設によるアマダリア川下流域開発が決定された。これらの水利施設建設は、自然改造計画と結びつける形で「偉大な共産主義の建設事業（Великие строки коммунизма）」と称された。とくに、主要トルクメン運河建設計画では砂漠の改造が謳われ、その対象地域は地理学的にも未解明の部分が多々存在したため、大々的に地理学者が予備調査に動員されることになる（地田 2009）。

自然改造計画では、ソ連周縁部の自然改造による農業・工業振興により、地域ごとの経済的差異の縮小を目指すことが含意されていた。ソ連地理学は、生物学や土壌学などとともに自然改造計画を理念的に下支えする役割を担うこととなった。ソ連地理学は、学界全体として自然改造計画を熱狂的に支持し、この点ではベルグ、グリゴリエフ、（後述する）その他の論者の間で相違はなかった。しかし、このような大規模な自然改造事業に地理学者が大々的に参画する上で、前述したような地理学の理論上・方法論上の対立状態は足枷となっていた。結果、地理学理論に関する学界内部での議論も白熱することになる。

まず、「自然」と「人間」の関係、地理学における「時間」の問題について、当時主流だった考え方について整理しておきたい。地理的環境による人間活動への影響を完全に否定する「レヴァキー」と共に、地理的環境が人間活動に一方的に影響を及ぼす「地理的決定論」あるいは「ゲオグラフィズム」といわれる立場は、史的唯物論の立場から否定されるべきものであった（Карачиук 1950: 11-12）。

そして、「社会と地理的環境との複雑な弁証法的過程」が存在し、生産手段の発展とともに人間による自然に対する支配力の質が変化し、社会主義社会においてのみ「社会全体の利益のために」地理的環境を変化させることができる<sup>とされた</sup>（Иванов-Омский 1950: 10-11）。ただし、前述したように、ここでいう社会主義社会における自然改造の担い手としての「人間」は民族・文化・風土といった人文的な差異を前提としていない<sup>とされた</sup>。

以上のような史的唯物論からの議論を見ると、前述のベルグ・グリゴリエフ論争はグリゴリエフに軍配が上がるように思われる。実際に、史的唯物論やマルクス主義のターミノロジーを用いて地理学理論を打ち立てるという点では、ベルグと比較するとグリゴリエフの積極性は際立っていた<sup>とされた</sup>。しかし、グリゴリエフに軍配は上がらなかった。その理由は、当時の科学界全般に求められていた「実践への応用性」の問題だった。前述したように、とくに主要トル

クメン運河建設計画では、地理学者による砂漠景観の自然誌の詳細な「記述」が、自然改造の前提として求められており、グリゴリエフが追求した地球物理学的な研究方法は理解されづらい状況だった。シャウとオルデンフィールドが述べているとおり、この時期、ベルグはグリゴリエフの挑発を正面から受けて立（こ）とはなかったが（Shaw & Oldenfeld 2008: 1406）、一九四九年に自著『ソ連邦の地文帯』の序文をしたため（出版はベルグ死後の一九五二年）、一九世紀ロシアの土壌学者であるヴァシーリー・ドクチャエフの理論を引用し、「農業は厳に地文帯の別に行われるべきで、各地文帯では地文帯ごとの農法が採用されねばならない」（Берг 1952: 8）と述べ、自らのコロギーの地理学理論が農業地理の画定に応用されることを明示している。その直後に、牧草輪作方式や自然改造計画決議について言及し、「かくして、ドクチャエフの素晴らしきアイディアが実践されつつある」（Берг 1952: 9）と称賛した。

「生活及び社会主義的实践からの遊離」を理由とするグリゴリエフ批判は、一九五〇年三月、共産党発行の『文化と生活』紙にグリゴリエフを批判する記事が掲載されることで皮切られた（Марков 1950: 454）。そして、ソ連科学アカデミー幹部会は一九五〇年六月に「社会主義建設実践からの研究の遊離」をひとつの理由としてグリゴリエフが所長を務める科学アカデミー地理学研究所を批判する決議を

発出した（この決議が公表されたのは同年末のことである）

(В Препринты 1950: 571-573)。追いつめられたグリゴリエフは、一九五〇年末、自己批判論文を『ソ連邦科学アカデミー通報』に掲載した。右論文で、グリゴリエフは、地理的環境の発展法則と人間社会の発展法則を混同し、地理的環境から遊離した地理プロセス（つまり、地球物理学的な手法を用いて地球システム全体の解明に重きを置き、個々の地理的環境を考慮に入れることを怠ったこと）を提唱した自らの立場について自己批判した。しかし、それでもベルグ及びその追隨者への批判の矛先をゆるめていない。右論文で、ベルグはカントやヘットナーの信奉者であり、地理学を受動的・観想的な記述の学問へと貶め人間社会の発展を地理的環境要因に帰していると糾弾し、さらには、ベルグに追隨し、地理的環境内部での「自己発展」法則を提唱し、自然現象の発展における外的要因の影響を否定したとされるモスクワ大学の地理学者たちを批判した (Григорьев 1950: 44-45)。

ベルグ本人は一九五〇年一月二四日に死去し、両者の論争にもとりあえずは終止符が打たれることになったが、結局、グリゴリエフは一九五一年に地理学研究所所長を解任され、その座を地形学者のインノケンチ・ゲラシモフに明け渡すことになった。ただし、グリゴリエフは科学アカデミー会員の地位には留まり、その後も活発な研究活動を

続け、地球物理学的な研究手法の普及に寄与している。

## IV スミルノフによるソ連地理学の断罪と それへの応答

戦後スターリン期における地理学理論・方法論に関する論争はベルグとグリゴリエフ論争のみに留まらなかった。

その背後では、ベルグ、グリゴリエフ、さらにはニコライ・ソルンツェフを中心とするモスクワ大学地理学部の地理学者たちすべてをひとまとめにして断罪する議論も登場した。一九五〇年初頭に『哲学の諸問題』誌に掲載されたオデッサの経済地理学者であるスミルノフによる論説がそれであり、前述のグリゴリエフによる自己批判はこのスミルノフの議論を受けたものだと思われる。

スミルノフによると、ソルンツェフは、ある景観はその起源の上では均質であるが、景観形態と自然地理プロセスの完全な調和はありえず、内部の相反する諸要素的作用により景観は常に動的に発展（「自己発展 (саморазвитие)」）するものだとして規定した。この点で、ソルンツェフは、より静態的なベルグの景観理論を克服しようとした。しかし、スミルノフによれば、ココロギー的手法を用いている点でベルグとソルンツェフらは同根であ

り、ソルンツェフの述べる景観の発展は非法則的で偶発的なものだと主張した。さらに、グリゴリエフについては、地理的環境と地球の地理的外殻に同義を与えることで「先進的な社会実践の要求から乖離」し、さまざまな構成要素の相互関係から成る「(自然) 地理プロセスが地理的環境を『創出』する」という説を唱えることで、地理的環境の弁証法的発展の法則性が結局は否定され、「発展」そのものが偶発に墮してしまふと批判した。そして、スミルノフは、グリゴリエフの「単一の地理的プロセス」理論を「誤った定式化」とし、最終的にグリゴリエフはベルグと同根の観念論に陥っていると断罪している。

スミルノフ自身は、外面的要素の恣意的な結合でしかない「景域 (ландшафтные зоны)」と、地理的環境の法則的發展の結果として形成される「地文帯 (географические зоны)」を区別し、地理学の研究対象は後者の「地理的帯性法則 (географический закон зональности)」説明を旨とすべきだと訴えた。スミルノフは、個々の地文帯に内在する地理的環境が地球の内的な力(土壌)と宇宙の外的な力(太陽光)に反応し、外的な作用をその内部構造に同化・吸収するというメカニズム(≡帯性法則)を想定していた。スミルノフは、この帯性法則の内容をより深めた人物として、自然改造計画のイデオログであるヴィリヤムストルイセンコの名前をあげている。この外的な作用に

「(人間) 社会の作用」、なかでもヴィリヤムスの「牧草輪作方式」を加えることで、「経済的な領域 (хозяйственно-устроена территория)」に多様な自然環境を有する諸区画を含み込むことが可能になるとした。このような個々の地理的環境における同化作用を牧草輪作や植物の環境馴化を通じて人間が計画的に行使する行為が「自然改造」として想定されることになる(Смирнов 1950)。

このスミルノフの議論はソ連地理学界に大きな議論を巻き起こすことになる。しかし、それはグリゴリエフがソ連科学アカデミー地理学研究所のトップから解任された後、一九五一年に入ってからのことであった。同研究所の学術会議でスミルノフ論文に関する議論が組織され、ここでは主要なソ連の地理学者が議論に参加している。ここでは多様な立場から多様な意見が出された。

自然地理学の側からは、ベルグ及びグリゴリエフの方法論的・理論的欠陥を認めつつも、全体として両者を擁護する議論が目立った。タジキスタンの自然地誌の専門家であるルフィン・セリヴァノフは、景観地理学そのものを否定するというよりは、景観・景域の区分が自己目的化し、実践応用の観点が欠如している点を批判している。グリゴリエフと同様に計量的手法による自然地理研究を行っていたダヴィド・アルマンドは、自然改造の実践応用の観点からすれば、グリゴリエフの理論である(熱収支や水分収支な

どの)「発展共通性(общность развития)」という観点から地域区分を行うことは否定すべきで、むしろ、共通の構成内容・形態(相似する「地形」など)を含んだ諸景観については同次元の発展段階にあるとみなし、その観点から自然地域区分を行うべきだとした。地形学者のアレクサンドラ・ケーシは、「自然環境の点では多様だが、経済的には単一の地域の研究」の重要性を唱え、この点でスミルノフの議論と相似するが、地理的環境の経済的利用という観点から自然的に同質的な地域、つまり「景観」を研究する意味はあるとしている。

新任の科学アカデミー地理学研究所所長であるゲラシモフは、スミルノフの議論を批判しつつ、景観地理学からの移行期にあるソ連地理学の現状を冷静に分析した。ゲラシモフは、ベルグの景観地理学がコロロギーの学問に留まり、地理学の一般法則にまで理論を高められなかった点を批判しつつも、事実(＝地誌)の記述と集積が地理学発展に重要な貢献をした点は正当に評価すべきだとし、ソ連の地理学者が「事実理論(факторная теория)」の擁護者だけであるというスミルノフの批判を糾弾した。また、ドリゴリエフが地球物理学的手法を自然地理学に導入したことに一定の評価をしつつ、問題なのは地理的環境におけるエネルギー・物質変化の「プロセス」だけではなく、その変化の「形態(форма)」の考究をドリゴリエフが怠り、

さらにヴェルナツキーやヴィリヤムスの理論的成果の取り込みを怠っている点で理論的な誤りがあるとした。

「自然改造」と関連させる形で最も興味深い指摘を行っているのはアンナ・ドスカチである。ドスカチは、社会生活の条件として地理的環境の研究を行うべきとするスミルノフの議論に一通り頷いておきながら、ドリゴリエフによる環境発展における熱と水分の役割の重要性について肯定している。その一方で、環境類型(типы среды)が発展し多様化する上でのプロセスはさらに複雑であり、これらの要素と生物圏(биосфера)との相互作用を検討せねばならないとした。これらの諸要素に影響を及ぼすことで環境類型やその発展方向性を変化させることができるとし、計画的な自然改造は可能で、それによって自然地域区分の境界も変化させることができるとした。この議論は土壤構造のみに着目したヴィリヤムスや遺伝子の存在を否定し植物の環境馴化を主張したルイセンコの議論を取り込みつつ、生物圏全体の影響を扱うことでそれに留まらない性格を有しているといえる(Витязева и Преображенский 1951)。

その後、一九五二年初頭、自然地理学者のイーゴリ・ザベーリンがスミルノフの議論を全面的に否定する論説を『全ソ地理学協会通報』に発表した。ザベーリンによると、スミルノフによるソ連の地理学者への批判を概ね「不当」

であり、資本主義体制下での観念論的な「景観」概念と社会主義体制下での唯物論的な「景観」概念は異なるとし、ソ連における「景観地理学」の意義を認めている。また、ザベーリンは、人間活動と「地理的帯性法則」を対峙させ、現実には、人間活動は（地理的環境への働きかけにより）この帯性法則の発現を弱め、（自然改造によって）地理的環境の地域間（地文帯間）差異を徐々に取り払う作用を有していると主張し、帯性法則の解明にこだわるスミルノフの立場を批判した。さらに、スミルノフがドクチャエフ理論を誤って引用し、「地理的帯性法則」を自然外被の一部にすぎない土壌（＝内部構造）の問題へと還元してしまっている」と主張し、結果としてヴィリヤムスとも距離をとる議論を展開した（Сагелитш 1952）。

最終的に、スミルノフにより貶められた景観地理学の復権と自然改造におけるその役割を明確にしたと考えられるのは、地理学協会幹部の一人であるスタニスラフ・カレスニクによる議論だった。カレスニクは「景観」概念を「自然の境界を有し、それぞれが統一的で、相互に制約的な地表面の一区画」と定義し、ある景観の完全なコピーは地上のどこにも存在しえないとしている。他方、類似する景観を類型論的に大分類することは可能であり、それは空間上でも時間軸のなかでも再現可能とした。そして、スターリン主導の自然改造で特徴的なのは、同時に広大な地域に

作用する自然改造を想定し、景観に多様な働きかけを行うことで、景観変化が加速化し、人間にとって好ましくない景観を消滅させるという根本的な改造が可能だとしている点であった。現行の自然改造は森林ステップ、ステップ、半砂漠、砂漠という類型論的な景観（＝景域）に作用するわけだが、そのための個々の施策は個々の景観の特徴の考慮が必要であり、そのなかで、ソ連の地理学者は自然改造の大事業に貢献できるとした。その結果、景観地理学はソ連地理学という学問そのものの発展に結びつくことと結論づけた。カレスニクは、ヴィリヤムスの牧草輪作を土壌肥沃化の条件の「ひとつ」と述べており、牧草輪作の「普遍的な」適用については言及せず、個別景観研究の重要性を指摘している点で、ザベーリンと同様、ヴィリヤムスやルイセンコとは一線を画していたといえる（Карачник 1952）。

## V 「単一地理学」批判と 経済地理学の危機感

スミルノフは前述の論文のなかで経済地理学についても言及した。スミルノフは、バランスキー、ユリアン・サウシキン、ニコライ・コロソフスキーといったモスクワ大学の経済地理学者について、経済的要素と自然的要素を地域

的に結合させ、それに基づいて経済地域区分を行うという方法論をとる以上、結局は景観地理学と大差がないと批判した（Смирнов 1950: 102-103）。その後、前述の科学アカデミーでの学術会議の場で、経済地理学者のピョートル・アラムピエフは、「地域学派」の経済地理学者（バランスキー、サウシキンらを想定しているものと思われる）が、自らの課題を特定の地域内部における自然ファクターと経済ファクターの相互関係に限定し、経済発展・配置の一般法則性を過小評価したことで、ある種の「地理的アクメイズム（географический акмеизм）」に堕していると批判し、スミルノフによる批判にかなりの程度迎合する発言を行っている（Витязева и Преображенский 1951: 178-179）。

その後も経済地理学者からのソ連地理学批判論文がいくつかが登場している。まず、オレーグ・コンスタンチノフがグリゴリエフの地理学理論を辛辣に批判する論文を一九五二年初頭に発表している。そこでは、グリゴリエフは自然地理学と経済地理学との関連性に関する見解（両地理学は「単一」か「別物」かについて）を二転三転させている点が批判され、人間活動を地理的環境の派生物とみなす「地理的決定論（デオグラフィズム）」にグリゴリエフは陥っていると批判。さらに、グリゴリエフの理論に従えば、人間活動が自然を改造するとはいえず、それ以前に地理的外殻が人間活動を規定してしまっているので、最終的に

経済地理学は自然地理学に従属することになってしまうと断罪した（Константинов 1952）。

さらに、ハリロフのミハイル・ヴォロブエフ・アルチョーモフという経済地理学者は、サウシキンについて実践的に産業を配置する学というよりも、すでに配置された産業に基づいて「領域」を学ぶ学として自然地理学と経済地理学が同根になっていると批判した。さらに、ヴォロブエフ・アルチョーモフはスミルノフをも批判する。スミルノフは「地文帯」の他に、その下位区分として「地理的ブロック（географический блок）」を想定していた。そして、本来は経済単位であるべき行政区画について、自然地理学的な地域区分が下位の行政区画と一致すると指摘したことと、結局は、自然地理と経済地理をない交ぜにしていると断罪した（Волобуев-Артемьев 1953）。

以上からわかるように、概ね経済地理学者からの批判は経済地理学と自然地理学との関係をめぐる問題であった。端的にいえば、両者の統一はあつてはならないというわけである。戦後スターリン期からフルシチョフ期にかけての経済地理学の主流は前述の「地域学派」だったが、そこには二つの潮流が存在していた。一つめは、革命直後の国土電化計画であるゴエルロ計画以来の経済地域区分法をそのまま受け継いだ学派で、おおむね資源分布を基準として「客

観的に存在している経済地域を解明して、そのまま区画するもの」(野原 1962: 102)であり、経済の分業・専門化に焦点を置いていた。ここには、前述のバランスキー、サウシキン、コロソフスキーといった経済地理学者が含まれる。二つめは、経済の地域的「専門化(特化)」と「複合化」を勘案して地域区分を行い、経済地域と行政地域の結合を旨とすべきだという学派である。ここには前述のアラムピエフらが含まれる(Арампиер 1959: 208-209)。前者の立場からすれば、天然資源に代表される自然環境が人間の生産活動と一致すべきであり、ここに自然地理学と経済地理学とが接近する余地を与えた。後者の立場からすれば、生産活動における自然環境ファクターの過度の強調は、各経済地域の「複合的發展」を妨げるものであり、ひいては地域間の経済格差の解消を阻害することになる。よって、自然地理学から経済地理学を切り離して別個に理論を打ち立てる必要があるとした。小野(1964: 1983)が論じているように、「単一地理学論争」は一九五〇年代から(及び、管見によれば、それ以前にも)存在していたが、フセーヴォロド・アヌーチンら自然地理学者をも議論に巻き込んで論争が本格化するの是一九六〇年代になってからである。

しかし、戦後スターリン期に多くの経済地理学者が自然地理学に対して辛辣な批判を浴びせる契機となり、最終的に「単一地理学論争」が勃発するにいたった直接の理由

は、当時のソ連地理学は自然地理学全盛の時代であり、スターリンの自然改造計画がそれに拍車をかけたことだと思われる。いみじくも、フーソンが指摘しているように、戦後スターリン期は経済地理学にとつて受難の時代であり、その傾向はスターリンの死後も続いた。一九五七年刊の『ソヴィエト大百科事典』の「地理学」の項目には経済地理学に関する言及がほとんどなかったという(Носон 1959: 80)。さらに、モスクワ大学の経済地理学者であるサウシキンが自然景観と農業分布の関連についての著作を一九四七年に刊行したこともあり(Сайкин 1947)、こうした一連の動向が科学アカデミーや地方の経済地理学者に危機感を与えたと考えられる。現に、一九五〇年末、グリゴリエフ批判やスターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』の刊行を受けて開かれた、レニングラードの経済地理学者による公開討論会の場で、ヴォリペは、「我が学問の危機の証左となっているのは、ここ何年もの間、レーニンやスターリンの立場に立って認められた経済地理学の大著がまったく世に出ていないという事実である。サウシキンの著作はマルクス主義的なのではない」と述べている(Работа товарища Сталина 1951: 172)。

## VI ソヴナルホーズ改革と経済地理学

フルシチョフ期のソ連地理学の動向については今後研究すべき課題であるが、フルシチョフ自身の号令により始まった地方への経済分権化政策であるソヴナルホーズ（国民経済会議）改革への経済地理学者の参画について若干だけ触れておきたい。

ソヴナルホーズ改革は一九五七年に開始され、これまでの部門別经济管理を地域別に改め、各経済地区に国民経済会議を設置し、各民族共和国閣僚会議（政府）に従属させることで経済行政の分権化を図るという改革であった（Тихома 2007: 348）。前述したアラムピエフが中心人物として経済地区の区画に加わり、経済地区と行政領域（つまり、民族共和国・自治共和国の境界も含む）の統一が模索された。しかし、その上位にある「大経済地区」という概念は残され、将来的にはその意義が増し、最終的にソヴナルホーズを「大経済地区」単位で再編する可能性は残されていた（Сухомлапа 1959: 260-267）。それが一部実施に移されたのが、一九六二年の中央アジア・ソヴナルホーズの設置（ウズベキスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタンを含む）のソヴナルホーズにまとめた）だっ

たと考えられる。

同時に、サウシキンら、アラムピエフとは一線を画していた経済地理学者の見解もある程度の影響力があつたようである。サウシキンの見解に従えば、純粹に分業の観点から経済地域を区分すればよいのであつて、民族原理を無視した経済地区を構想することも論理的にはありうる話だつた。実際に、サウシキンは、具体的にどの領域を占めるのかは明記していないものの、石油・ガス・化学工業を重点経済部門とする「西中央アジア（トゥラン）経済コンプレクス」を提案している（Сайкин и Карашикова 1962: 142）。そして、一九六〇年から一九六二年までカザフスタン共産党中央委員会第一書記を務めたディンムハメド・クナエフの回想によると、カザフスタンの石油埋蔵地域であるマンガイシユラク半島をトルクメニスタンに移譲したらどうかとの提案がフルシチョフからされたことがあつたという（ただし、実践には移されなかった）（Кышев 1994: 195）。

### おわりに

ソ連地理学では、スターリンをトップとする一国社会主義体制が成立し、民族・共和国境界画定が最終的に完了し

た一九三〇年代以降、民族や文化といった人文的観点は地理学から排除され、戦後スターリン期を含め「民族」に係る差違を地理学の立場から扱った研究は管見のかぎりほとんどなかったと考えられる。当時のソ連地理学界で論争となった「景観」や「景域」「地文帯」といった空間概念に人文的要素はまったく含まれていないか、(ベルグの景観理論における環境と人間の「調和」など)含まれていたとしてもきわめて希薄であった。グリゴリエフによる「地理的外殻」や「発展プロセス」といった概念は地球システム全体を俯瞰するものであり、やはり人文的要素は考慮に入れられていなかった\*。また、一九四八年から始まる「自然改造計画」は、地理学における環境と人間の関係について考えさせる契機となったが、そこで語られる「人間」とはきわめて画一的な存在だった。

自然改造計画で実際に自然改造の対象となった地域もやはり民族原理からは乖離していた。植林計画の対象となった地域はステップ・森林ステップ地帯であり、ヴォルガ川以西からウクライナの西端まで含む地域だった。運河建設は自然改造の単位として「水系」を対象としており、たとえば、主要トルクメン運河建設で自然改造の対象とされた地域はカラカルパクスタンとトルクメニスタンであり、やはり民族領域の境界を跨ぐものだった。

戦後スターリン期における学知の一般的な動向と同じ

く、地理学に対しても「実践への応用性」が求められ、その観点からベルグ、グリゴリエフらによる従来の地理学に対して批判が続出した。ベルグは、自著のなかで「地文帯(景域)」とそこで採用される農法の一致につき述べ、景観地理学の農業への応用性について言及したが、自然改造計画を推進する地理学者からすれば、これではまったく不十分であった。スミルノフやザベリンが論じたように、自然改造計画は、既存の「景域」や「経済地域」、そして、無論、民族原理による「行政領域」を超えることを想定していたのである。そして、カレスニクの議論にあるように、根本的な自然改造を行う上で人間が環境に働きかけるためにも、対象となる地域の「景観」を詳細に知る必要があった。そして、実際に、砂漠やステップの未知の景観の調査のためにソ連中央の地理学者が大々的に動員されることになる。

戦後スターリン期は、訴えかける対象によって「普遍主義(=パトリオティズム)」と「個別主義(=ナショナルリズム)」が使い分けられた時代であった。宇山智彦やスレッツキンが論じているように、ソ連で民族ごとの行政領域が設置されたのは、ソ連帝国の政策における「個別主義」の表れであった(宇山 2006: 57; Slezkine 1994: 415)。現実には、戦後スターリン期における地理学「知」をめぐる政策において「民族」原理が無視されていたわけではもちろんない。

たとえば、中央アジア地域での共和国科学アカデミーの設置など (Gievers 2003)、ここではナシヨナリズムの論理が前面に出され、擬似的なネイション・ステート形成のための制度構築が行われている。また、戦後スターリン期には共和国別の地理学啓蒙書の刊行が行われている。ウイニツチャクン (2003) は、領域画定技術 (つまり、地理学や地図学) が国民概念 (ネーションフッド) を空間的に創造したということ、タイを例として論じている。ソ連でも各民族共和国の地理学者による活動を中心に同様の傾向が存在しており、これは現在の旧ソ連諸国のネーションフッドの創造に寄与したという。この帝国の中核と周縁の地理学者の関係については、今後研究すべき課題である。

他方、「自然改造計画」は共産主義建設の前提条件となる地域間経済格差の縮小を目指すものであり、「普遍主義」に訴えるものだったといえる。実際に、主要トルクメン運河建設など「偉大なる共産主義の建設事業」では「全人民的建設事業 (всенародная стройка)」といったパトリオティックなレトリックが頻繁に用いられている。このようなレトリック、その内実を支えたソ連地理学は、民族や民族領域の境界を超えたソ連帝国の一体性に正統性を付与するものだったと見なすことができるだろう。そして、ソ連地理学は、異なる「景域」に跨る領域に自然改造を施すことで、帝国周縁地域の産業構造の変革を促すことへの理論

的基礎をも与えたことになり、帝国周縁への経済的な浸潤手段としての地理学という役割も存分に果たしたと考えることができるだろう。しかし、当時隆盛を誇っていたルイセンコラの農学理論について、景観地理学者を中心に完全な迎合は回避し、学問としての自律性は固守した。

ソ連地理学が「民族領域」の問題と正面から向き合わねばならなくなるのは、フルシチョフ時代になってから、ソヴナルホーズ改革に経済地理学者が参画するようになってからのことである。そして、スターリンの死後、一時は下火になった「自然改造」概念は、ソ連科学アカデミー地理学研究所のゲラシモフ所長の下で根強く残り (Богучарков 2006: 482)、「民族領域を大きく超える領域に作用する」「シベリア河川転流計画」など大規模事業がソ連地理学の支援の下で策定されることになる。ゲラシモフら「構築地理学 (конструктивная география)」派による「計画的な自然改造」の探求、その経済地理学との関係性も今後の重要な研究課題である。

#### ●付記

本稿は、日露青年交流センター若手研究者等フェローシップ (二〇〇五年度) 及び北海道大学スラブ研究センター鈴木・中村基金奨励研究員制度 (二〇〇七年度) による研究助成の成果の一部である。

●注

\*1 アレクサンダー・モティルは帝国について、車輪にたとえて「ハブ」と「スポーク」というタームを用いて帝国「中核」と「周縁」との関係性を表し、周縁間を結ぶ「リム」の関係がないことがその特徴だとしており、ソ連についてもこの「中核＝周縁」構造が当てはまるとしている (Motyl 2001: 15-20)。

\*2 一九二〇年代初頭、「民族」原理での領域区画に従事した民族学者と「経済」原理での領域区画に従事した地理学者の利害は、それぞれ民族問題人民委員部と国家計画委員会 (ゴスプラン) の対立に呼応する形で、(完全にはないにせよ) 対立関係にあったといえる (Hirsch 2005: Chapter 2)。ただし、以下に述べるように、ソ連初期の地理学には「人文」的要素は希薄であり、当時は民族学が同時に人文地理学的な役割も担っていたと考えられる。

\*3 しかし、だからといってソ連では民族的な「形式」そのものが否定されたわけではなく、後述するように、各民族及び民族領域の個別性・特殊性が前面に押し出されることもあった。民族的「形式」と社会主義的「内容」は対象によって使い分けられたのである。また、ソ連地理学内部でも、前述のバランススキアの議論や、経済的状态、歴史的過去、慣習、文化など「形式の多様性」を勘案して各経済地域の内情を研究すべきだとの経済地理学者ヴラジミール・ヴォロペによる議論も存在した (Работа товарища Сталина 1951: 173)。

\*4 この議論は、ヨーロッパ地理学における「環境決定論」に対する「環境可能論」(ポール・クラヴァルによれば、「自

然が可能性を与え、人間がそれを処理する」、「自然に干渉し、もはやそれに服従することのない人類」(クラヴァル 1951: 26)といった自然と人間の関係性に要約される)に相当するが、人間による環境へのアプローチについて、それを「社会全体の利益のために」行いうるという社会主義社会の優位性を説くという点で異なっていた。また、「環境可能論」の代表的地理学者であるフランスのヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュは、「生活様式」という概念を加えることで環境へのアプローチにおける人文的差異を勘案していたという点で当時のソ連地理学とは大きく異なっていた (杉浦 2005: 78)。戦後スターリン期のソ連でも、たとえば、シンフェローポリのグティリという地理学者が、人の手が加わって改造された「文化景観」を研究する必要性があると主張しているが、ここには人間の差異に係る人文的要素に関する言及はなし (Гутрильс 1951: 184)。

\*5 一例であるが、一九四七年、グリゴリエフは「第一次五年計画が始まってようやくブルジョワ地理学方法論の観念論的本質が暴き出され、その後、弁証法的唯物論手法に基づいた新たな科学的メソッドが生み出された」と述べたという (Shaw & Oldenfield 2008: 1404)。

\*6 前述したとおり、グリゴリエフは、経済地理についても「社会・経済的プロセス」といった概念を用いて言及しているが、人文地理学の観点からこの概念がいかなるものだったかについては今後の研究課題としたい。

●参考文献

- ウイニチャクン、トンチャイ (2003) 『地図がつくったタイ——  
国民国家誕生の歴史』石井米雄訳、明石書店。
- 宇山智彦 (2006) 『個別主義の帝国』ロシアの中央アジア政策  
——正教化と兵役の問題を中心に——『スラヴ研究』五三三号、  
二七—五九頁。
- 小野菊雄 (1964) 『ソ連地理学界におけるひとつの問題——ヴェ・  
ア・アヌーチンの著書をめぐってのモスクワ大学における討  
論』『名古屋大学文学部研究論集』三三二号、六一—七三頁。
- 小野菊雄 (1983) 『一九五〇年代前半のソ連地理学の一動向——  
『哲学の諸問題』誌の諸論文について』『歴史学・地理学年報』  
七号、二九—五〇頁。
- クラヴァル、ポール (1975) 『現代地理学の論理』竹内啓一訳、  
大明堂。
- 杉浦章介 (2005) 『人文地理学のものゝ味方とヴィタルの学統』  
杉浦章介・松原彰子・武山政直・高木勇夫『人文地理学——  
その主題と課題』慶応義塾大学出版会、一—二八頁。
- 地田徹朗 (2009) 『戦後スターリン期トルクメニスタンにおける  
運河建設計画とアラル海問題』『スラヴ研究』五六号、一—  
三六頁。
- 中村泰三 (1982) 『ソビエト経済地理学の誕生』『人文研究』  
三四卷六号、二四五—二六六頁。
- 西川治 (1961) 『地域科学序説——比較研究のための基準空間論』  
『比較文化研究』二号、一三一—五五頁。
- 野原敏雄 (1962) 『ソ連の経済地域について』『中京商学論叢』  
九卷一号、七五—一〇六頁。

- バランスキー (1953) 『ソヴェト経済地理』内村有三訳、河出書房。  
ハットナー、アルフレート (2001) 『地理学——歴史・本質・方  
法』平川一臣・守田優・竹内常行・磯崎優訳、古今書院。
- Berg, L.S. (1950) *Natural Regions of the USSR* (translated by  
*Olga Adler Tietbaum*). N.Y.: Macmillan.
- Hirsch, Francine (2005) *Empire of Nations: Ethnographic  
Knowledge and the Making of the Soviet Union*. Ithaca:  
Cornell University Press.
- Hooson, David J.M. (1959) Some Recent Development in the  
Content and Theory of Soviet Geography. *Annals of the  
Association of American Geographers* 49(1): 73-82.
- Kojevnikov, Alexei B. (2004) *Stalin's Great Science: The  
Times and Adventures of Soviet Physicists*. London: Imperial  
College Press.
- Martin, Terry (2001) *Affirmative Action Empire: Nations and  
Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*. Ithaca: Cornell  
University Press.
- Motyl, Alexander J. (2001) *Imperial Ends: The Decay,  
Collapse, and Revival of Empires*. N.Y.: Columbia University  
Press.
- Shaw, Denis J. B. and Oldenfield, Jonathan D. (2008)  
Scientific, Institutional and Personal Rivalries among Soviet  
Geographers in the Late Stalin Era. *Europe-Asia Studies*  
60(8): 1397-1418.
- Sievers, Eric W. (2003) Academy of Science in Central Asia  
1922-1998. *Central Asian Survey* 22(2/3): 253-279.

- Slezkine, Yuri (1994) The USSR as a Communal Apartment, or How a Socialist State Promoted Ethnic Particularism. *Slavic Review* 53(2): 414-452.
- Аглампиев, П.М. (1959) *Экономическое районирование СССР*. М.: Госпланиздат.
- Баранский, Н.Н. (1946) Страноведение и география физическая и экономическая. *Известия Всесоюзного географического общества* 78(1): 9-24.
- Берг, П.С. (1952) *Географические зоны Советского Союза*. Том II. М.: Географиз.
- Богучарский, В.Т. (2006) *История географии. Учебное пособие для ВУЗов*. М.: Академический проспект.
- Витязева, В.А. и Преображенский, В.С. (1951) О вопросах географической науки. *Вопросы философии* №3: 174-180.
- Волобуев-Артемов, М.С. (1953) Еще о методологических основаниях экономической географии и о борьбе с пережитками геггнерианства. *Известия Всесоюзного географического общества* 83(2): 169-184.
- Вольпе, В. (1932) Против идеалистических и механических теорий в географии. *На методическом фронте географии и экономической географии*. М.-Л.: Государственное социально-экономическое издательство. 27-44.
- В Президиуме (1950) В Президиуме Академии Наук СССР. *Известия Академии Наук СССР. Серия географическая и геофизическая* №6: 571-573.
- Григорьев, А.А. (1932) Предмет и задачи физической географии (Общие принципы изучения структуры физико-географического процесса). *На методическом фронте географии и экономической географии*. М.-Л.: Государственное социально-экономическое издательство. 45-59.
- Григорьев, А.А. (1937) *Опыт аналитической характеристики состава и строения физико-географической оболочки земного шара*. М.-Л.: Главная редакция горно-топливной и геолого-разведочной литературы.
- Григорьев, А.А. (1950) Великие Сталинские стройки и задачи географии. *Вестник Академии Наук СССР* №12: 41-47.
- Гутырь, И.Г. (1951) Важнейшие методологические вопросы географии. *Вопросы философии* №3: 183-189.
- Забегин, И.М. (1952) Несколько замечаний по поводу выступления А. М. Смирнова. *Известия Всесоюзного географического общества* 84(1): 72-80.
- Иванов-Омский, И.И. (1950) *Исторический материализм о роли географической среды в развитии общества*. М.: Политиздат.
- Калесник, С.В. (1950) Значение трудов И. В. Сталина для географии. *Известия Всесоюзного географического общества* 82(1): 3-18.
- Калесник, С.В. (1952) Учение о ландшафтах в связи с преобразованием природы в СССР. *Известия Всесоюзного географического общества* 82(3): 245-254.

- Константин О. А. (1952) О суждениях академика А. А. Григорьева по методологическим вопросам экономической географии. *Известия Всесоюзного географического общества* 82(1): 59-72.
- Кунаев, Д. А. (1994) *От Сталина до Горбачева. В аспекте истории Казахстана*. Алматы: Санат.
- Марков, К. К. (1950) Ошибки Академика А. А. Григорьева. *Известия Всесоюзного географического общества* 82(5): 453-471.
- О плане (1951) *О плане полезащитных лесонасаждений, внедрения травянополюных севооборотов, спирителства прудов и водоёмов для обеспечения высоких и устойчивых урожаев в степных и лесостепных районов европейской части СССР*. М.: Политиздат.
- Пихоя, Рудольф (2007) *Москва. Кремль. Власть. Сорок лет после войны 1945-1985*. М.: АСТ.
- Работа товарища Сталина (1951) Работа товарища Сталина «Марксизм и вопросы языкознания» и задачи экономической географии. (Краткий отчет о дискуссии в Отделении экономической географии). *Известия Всесоюзного географического общества* 83(2): 161-185.
- Саушкин, Ю. Г. (1947) *Географические очерки природы и сельскохозяйственной деятельности населения в различных районах Советского Союза*. М.: Географгиз.
- Саушкин, Ю. Г. (1980) *Географическая наука в прошлом, настоящем и будущем: Пособие для учителей*. М.:

- Просвещение.
- Саушкин, Ю. Г. и Калашникова, Т. М. (1962) Гипотеза перспективного развития системы районных территориально-производственных комплексов СССР. *Вопросы географии* 57 (Экономическая география СССР в перспективе): 121-145.
- Смирнов, А. М. (1950) Об основах географической науки. *Вопросы философии* №2: 83-103.
- Сухопара, Ф. П. (1959) Единство экономического и административного районирования СССР. П. М. Алашпиев и др. (ред.) *Вопросы размещения производительности и экономического районирования*. М.: Госпланиздат. 254-287.

(まだ・つづろ／東京大学大学院総合文化研究科博士課程)